開催地名：愛媛県八幡浜市	
開催日時	令和２年１月 20 日（月）　13：30 ～ 15：00
開催場所	八幡浜市文化会館（ゆめみかん）
語り部	仲條　富夫　　（千葉県旭市）
参加者	自主防災会、その他　約 100 名
開催経緯	年に 1 回、南海トラフ地震を想定した津波、土砂災害避難訓練及び各地区での防災研修を市内一斉に実施しているが、参加者の顔ぶれはほぼ同じ人となっている。また、自主防災会を中心に、地域の防災力向上を図っているが、活動内容や参加率は各地で温度差がある。近い将来、高い確率で発生が危惧されている南海トラフ地震に対する備えを高めたいと考え、語り部の講演を開催する。
内容	（１）　東日本大震災の当日 千葉県旭市では震度５強を観測し、液状化現象、飯岡海岸等での津波被害が発生し、死者 14 名、行方不明者２名、重軽傷 12 名のほか、住家全壊 336 世帯、住家大規模半壊 434 世帯、住家半壊 512 世帯、住家一部損壊 2,545 世帯を記録した。 大津波警報が発令され、防災無線で避難が呼びかけられて、ほとんどの住民は避難所へ避難した。第一波が押し寄せた時は避難所はパニックとなったが、詳しい情報が全く入ってこない状況の中で、第一波より弱かった第二波を見て安心してしまった部分もあったと言える。このタイムラグにより、犠牲者が出てしまった。過去のチリ地震の際の津波を経験しているにもかかわらず、そして決して甘く見ていたわけではないのに。 （２）東日本大震災を経験して 災害に遭ったとき、72 時間はまず家族で頑張る必要がある。その後、市、県、国の公助が入る、というのが実情である。学者が、九州地方では地震の心配はないと言っていた矢先に、熊本県で震災があった。この例からも、日本全国、どこで地震が起こっても全然おかしくない。 避難所での生活について特筆すべき点は、ガソリンが非常に不足していたことである。そのような状況の中では、なるべく多くの人に行き渡るよう、各自が５～10 リットル程度の給油で我慢すべきところを、車を５～６台も所有している何軒かの家族が、自分たちの車を満タンにするという出来事があった。結果的に、本当に必要な人に行き渡らなかった。同様に、水が足りないとなると、周りの声が聞こえなくなり、まるで奪い合いの様相になった。乳児を抱えたシングルマザーの声でさえも聞こえなくなってしまった。情報不足からこのような事態が発生するのだが、物資を分け合うときは、奪い合えば足りなくなるということを認識し、皆が分け合う必要がある。

	ボランティアの方々は、多い時は１日に 1,000 名近くの方が来てくれた。とてもありがたかったが、午前中に来ていただいて、保険に加入していただいたうえで、各地域に必要人数を割り振る必要があったため、お願いしたい業務内容や必要な人数等について、しっかりと把握している人が極めて少ない状況の中ではうまくマッチングができず、活用できなかったと言える。これは他の県、地区でも起こっていた現象だと推察する。 （３）まとめとして 本日お越しの自主防災会の皆さんのように、防災に関する高い意識と知識を持つ、地域防災の推進者の方々の声が、災害の現場では決断を促すと言える。また、一番大切なことは、「言葉」だと痛感した。多くの人たちが甚大な被害を受けて避難所生活をしている中で、互いを思いやる「言葉」は本当にありがたいものであり、今でも忘れられない。一言でも良いので声かけをして、お互いに励まし合っていくことが、復興に向けての第一歩につながると強く思う。 さらには、常に対話を行い、災害に対して立ち向かっていくこと、地区に閉じこもらないような生き方が一番大事だと思う。被害を受けた人たちは、自分の体験を発信していくことが重要だと思う。話を聞いてもらった人には、是非今後の防災活動につなげてもらいたい。
開催地より	実際に被災された方の体験談だったので、避難所のことや、家族のこと、近隣住民とのつながりの大切さなどを聞くことができた。学んだことをどう行動に移していくかが大切であり、一歩踏み出すことの重要性や、自主防災組織の大切さを強く感じた。